

令和8年度「健やかな体」育成プログラム

学校番号：21010

学校名：二条小学校

令和7年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 結果

分析

<p>体力・運動能力 ＜男子＞</p>	<p>全国・札幌市平均を上回ったもしくは同程度の種目 反復横とび、20m シャトルラン、立ち幅とび</p>	<p>全国平均・札幌市平均を下回った種目 握力、上体起こし、長座体前屈、50m 走、ソフトボール投げ</p>	<p>反復横とび（T点 54.0）や20m シャトルラン（T点 50.9）の結果が良好であり、敏捷性や持久力において平均を上回っている。一方で、握力（T点 47.4）やソフトボール投げ（T点 47.0）が平均を下回っており、筋力や投力に課題が見られる。</p>
<p>体力・運動能力 ＜女子＞</p>	<p>反復横とび、上体起こし、長座体前屈</p>	<p>握力、20m シャトルラン、50m 走、立ち幅とび、ソフトボール投げ</p>	<p>反復横とび（T点 55.0）や上体起こし（T点 53.8）が平均を上回り、敏捷性や筋持久力に優れている。一方、握力や持久力、投力など多くの種目で平均を下回る結果となった。特に女子においては、運動が得意・不得意の二極化が懸念される。</p>
<p>運動習慣等 調査</p>	<p>児童質問紙の結果から、体育の学習に対して「好き・やや好き」と回答した割合は、男子 92.5%（全国 91.8%）、女子 89.3%（全国 89.5%）と非常に高い。また、授業に「進んで参加している」と回答した割合も男子 94.3%、女子 91.1%に達している。1週間の総運動時間が60分未満の「ほとんど運動しない子ども」の割合は、男子 11.3%（前年度 11.4%）に対し、女子は 15.8%（前年度 8.5%）。</p>		<p>本校児童の体育学習に対する肯定感は極めて高いと言える。実際の運動習慣からも分かるように、「意識（好き・意欲）」と「実践（運動時間）」に乖離が見られるため、特に女子については授業内での達成感をいかに自発的な意欲に変換し、日常の運動習慣へと繋げていくかが喫緊の課題である。</p>

①体育・保健体育等の授業の充実

②授業以外で子どもの運動機会を創出する取組

③子どもが自ら健康の保持増進を図る取組

<p>具体的な取組</p>	<p>○「課題探究的な学習」の推進 単元を通して運動の楽しさに十分に触れながら、自ら課題を見付け試行錯誤する過程を重視する。児童が「何度もチャレンジしたい」と思える活動構成や場、お互いに高め合える協同的な学びの場を整えていく。</p> <p>○全員が主役になれる工夫 「学びのコントローラー」を児童自身ももち、運動が苦手な児童でも自分の力に応じた場やルールを選択できるようにする。どの子どもも達成感を味わえるユニバーサルデザインの視点を取り入れる。</p> <p>○専門性を生かした授業の充実 養護教諭、栄養教諭、体育専科教諭による授業や外部講師との連携により、学習内容を充実させる。</p>	<p>○「二条キラリニック」・「長縄大会」の継続 「二条キラリニック」や「長縄大会」を実施する。単に運動する場を提供するだけでなく、学級や個人で「昨日の記録を1回でも更新する」「チームで協力して目標回数を目指す」といった明確な目標設定を促す。このことが、休み時間等の自発的な練習意欲を喚起し、集団の中で高め合いながら体を動かすきっかけになると考える。</p> <p>○「NIJO アクション」の整備 体力テストの課題解決に繋がるような運動メニューを整備する。また、体育委員会等を活用し、児童の声を反映させながら「やってみたい」と思わず体を動かしてしまうような内容へと更新を図る。</p> <p>○運動遊びの更なる奨励 ロング昼休み等を活用し、多様な動きを経験できる遊びの機会を創出する。グラウンドや体育館だけでなく、ホールや玄関前などでも体を動かすことができるようにし、よりたくさんの子どもの体が動かせる場をつくる。</p>	<p>○養護教諭との連携による系統的な指導 養護教諭と密に連携し、低・中・高の発達段階に合わせた健康課題（睡眠、食事、運動、スクリーンタイム等）を明確にする。保健の授業や学級活動を通じ、自らの生活を振り返り、自ら律する力を育てる保健指導を系統的に行う。</p> <p>○栄養教諭との連携による「食」の指導 栄養教諭による専門的な指導を通じ、「健康な体は自らの食事で作られる」という意識を高める。日々の生活を元気に過ごすために必要な栄養素や、成長期における食事の重要性を学び、実践に繋げる場を設ける。</p> <p>○SC（スクールカウンセラー）による「心の健康」教育 高学年を対象に、SCによるストレスマネジメント等の授業を実施する。ストレスへの適切な向き合い方や心のセルフケアを学び、心身ともに健やかな生活を送るための基盤を育てる。</p>
---------------	---	---	--

家庭・地域との連携・

- ・水泳学習やスキー学習を中心に、スポーツクラブのインストラクター等外部講師の協力を仰ぎ、学習内容を充実させる。
- ・各学年の保健指導において、学校医をゲストティチャーに招き、子どもの実態を踏まえた指導の充実と家庭への呼び掛けを行う。

